＜前回：宗教哲学と法・合理性＞

（1）キリスト教思想と合理性

１．青山学院大学総合研究所の研究プロジェクト「キリスト教大学の学問体系論」

パウル・ティリッヒ『諸学の体系――学問論復興のために』（法政大学出版局）、

ヴォルフハルト・パネンベルク『学問論と神学』（教文館）

スタンリー・ハワーワス『大学のあり方――諸学の知と神の知』（ヨベル）

２．20 世紀：科学がその本質（科学性）をめぐって、方法論から社会的存在意義に至るまで問い直された時代。

３．学問としての神学：神学の合理性とは何か、神学はいかなる学問であるか。

インゴルフ・ダルフェルト『神学と哲学』

（Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*, Wifp and Stock Publishers, 1988.）

↓

学問としての成立根拠をキリスト教の外部より導入。キリスト教神学の合理性、神学外部の諸学問との関係性に依存している。

４．神学と諸学問との関係づけは神学と諸学問の共同作業のための前提条件。

伝統的には自然神学の役割（Ｊ・モルトマン『神学的思考の諸経験――キリスト教神学の道と形』新教出版社）。

（2）神学の地域性

５．日本のプロテスタント神学の「ゲルマン捕囚」。

６．ドイツとアメリカ。ティリッヒの場合。

・ティリッヒとパネンベルク：ドイツ神学の伝統

20 世紀初頭の学問論・科学論（ドイツ観念論から新カント学派と現象学）と 20 世紀後半の学問論・科学論（特に科学哲学と解釈学）といった文脈の相違。学問体系内の体系的神学として神学（組織神学）の構想。

・ハワーワス：アメリカ神学の伝統

イェール学派の特質とも言えるキリスト教倫理の視点。『大学のあり方』の翻訳者東方敬信、「著者スタンリー・ハワーワスは、そのポスト近代の状況のなかでキリスト教神学の立場から自由自在に対話の相手を見つめながら論陣をはっていく」。

ということである。

７．ティリッヒ『組織神学　第一巻』（一九五一年）。

体系的形式の役割を「知的主張の論理的一貫性を保障する」ことにある。

合理性：神学体系内部＋他の諸学問との間の首尾一貫性。

８．真理論：首尾一貫性＋主張内容と実在・現実との対応、また現実を生きる人間の経験との合致。cf. 数学と実在世界

↓

ドイツ的＋アメリカ的

（3）合理性から研究プログラムへ

９．近代の科学論：理論の数学的定式化の採用、実験・観察による検証。

検証の不可欠性（経験主義）。

自然科学における科学論が要求する「数学的に定式化された理論・仮説」と「その実験による検証の再現可能性」とは、厳密な仕方で、キリスト教の思想あるいは信仰に適応できるわけではない。

しかし、

10．近代以降のキリスト教思想と経験主義。内村鑑三ら明治キリスト教における「実験」概念の使用。

11．科学者（科学的知の累積性あるいは進歩）と科学哲学者の相違。
近代のやや素朴な「仮説―検証」への疑問。
カール・ポッパーの批判的合理主義。反証主義。→パネンベルク『学問論と神学』
12．パネンベルク：神学的諸命題が反証可能な仮設的性格を有すること、その意味で、神学が科学たり得る。
13．神学は本来神を対象とする学問である。
神自体が人間の把握可能な現実性を超えていると同時に、神の実在は個別的な経験の有意味性（とそれを可能にする意味総体性＝意味の地平）のなかでそのつど与えられる。
しかし、この意味の地平は歴史的に構築され非完結なものであって、学問としての神学が行う言明は、それがこの歴史の進展の中で行われるかぎり、経験の進展による確証あるいは反証にさらされたままであり、一つの仮説にとどまる（学的神学の仮説性＝合理性）。
神学も人間の知であるかぎり不完全・非完結的であり、神学的言明の最終的な妥当性は現実の総体性の終末論的先取りとしてのみ確保される。この総体性は歴史（意味の地平）を超えた終末の事柄であり、神学的知に対してその真理性を認めることができるのは、それが終末の事柄を先取りするかぎりにおいてなのである。
↓
神の学問（あるいは科学）としての神学は、経験の進展による確証・反証テストを受けつつも、先取りされた総体性に向かってその領域を拡大し続ける研究プログラムとして捉える。

（４）研究プログラムかパラダイム論か

16．ナンシー・マーフィ：イムレ・ラカトシュの研究プログラム（リサーチプログラム）構想をパネンベルクに見出す。
17．累積的に進歩する知的営みとしての科学像とは異なる立場。
トーマス・クーンのパラダイム論　→　ハンス・キュング（『キリスト教思想の形成者たち――パウロからカール・バルトまで』新教出版社）。

（５）合理性再考あるいは合理性の拡張

18．無神論的自然主義と宗教的原理主義という対極的な二つの立場。
科学と宗教のいずれかのみが合理的であり（単一の合理性概念）、相手は非合理的。この単一な合理性概念の克服。
合理性概念（証拠主義的合理性概念）は人間の生きる現実に適用するには狭すぎる。
事実として多様な経験の仕方が存在し、この多様な仕方に即した合理性概念が求められるべきである――。
19．ヒック、世界についての複数の経験可能性（＝宇宙の両義性）。
「我々は様々な結論に至った。いくつかのものは有神論的結論を支持するが、しかし決定的な仕方においてではない、しかしほかのものは無神論的結論を支持する。しかし、これもまた決定的な仕方でではない。我々が考察した宇宙のそれぞれの局面は有神論的解釈と自然主義的解釈の双方が可能であることがわかる。」（Hick, 1989, 122）
20．「それゆえ、アンセルムスの存在論証のこれらの再定式化された諸改訂版についての我々の判断は、次のようにならざるを得ない。おそらく、それらはその結論を論証あるいは確立したと言うことはできない。しかし、それらの中心的前提を受け入れることは合理的であるのだから、それらはその結論を受け入れることが合理的であることを示しているのである。おそらく、このことがこの種のどんな論証に対しても期待できるすべてなのである。」（Alvin Plantinga, *The Nature of Necessity*, Clarendon Press, 1974, 221）
↓
後ほど、ヒックの議論にて。

７．宗教研究の基礎論としての宗教哲学

０．宗教哲学は、宗教の哲学であり、宗教研究の哲学である。
「５．キリスト教神学と宗教哲学」（11 月 6 日）から。
「まず、当面の作業として進める必要があるのは、20 世紀の宗教哲学の再検討である。――モダンの反省なしのポストモダンの提唱は不毛な遊びに堕する恐れがある――。この点について、ティリッヒあるいは波多野精一など20 世紀の代表的な宗教哲学の再評価が有益である。」

↓

宗教研究の基礎論としての宗教哲学
宗教研究は次の三つの問いを前提とする。
なぜ宗教か（近代の宗教批判にもかかわらず）／宗教とは何か（宗教本質論）／どの宗教なのか（宗教的多元性）
近代以降の宗教哲学におけて、この問題を確認すること。
シュライアマハー／ティリッヒ／波多野精一／ヒック
ティリッヒについては、芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年。
波多野については、2015 年度の特殊講義・前期
今回は、シュライアマハーとヒックを取り上げる。

Ａ．シュライアマハーの宗教哲学

１．シュライアマハーと宗教哲学の基本問題

（1）『宗教論』の信仰概念

１．信仰・宗教の規定
意図：宗教の独自性－宗教学の基礎、宗教哲学
宗教多元性の問題（第五講）
２．宗教と形而上学・倫理学との区別＝宗教の固有性・実在性
宗教の本質について（宗教本質論・第二講）→「直観・感情」(「本質－現象」の枠)
1) 直観：有機体的な統一的な宇宙、スピノザ的
無限と有限：表現、象徴
2) 感情「それは多様性と個性とを象徴にした無限で生きた自然という根本感情」「無限に向かう憧れ、無限に対する畏れの心」
「聖なるあこがれ」「内なる本性の呼び掛け」
3) 直観と感情
4) 形而上学と道徳
３．ロマン主義
啓蒙的合理主義の克服
４．シュライアマハー宗教哲学の特徴
①宗教・信仰の直接的場へ「感情」「直接意識」　→　宗教現象学へ
②人間性における宗教　→　弁証神学、宗教の本質概念（本質論から現象論へ）
③「感情」から「認識」「行為」へ　→人間の存在構造における宗教性（哲学的人間学）
これは、信仰を精神の諸機能の一つの特定機能としての知性、意志、感情のいずれかと同一視することの不十分さを意味する。むしろ、これらの諸機能を統合した人間精神（人間理性、人間存在＝実存、人間性）における本質的な可能性として宗教・キリスト教を理解すること、その上でその特殊な実現としてのキリスト教的信仰の意義を論じすることが、要求される。

④実定性　→　個別的で歴史的な諸宗教（実定宗教）への定位 cf.　理神論・自然宗教

「宗教がまっさきに心情に語りかけてくるもっとも内面的な深みへ、きみたちを案内したいのだ」(17)、「人間存在の内面へ」(18)、「きみたちが軽蔑しているこれらの体系の中には、宗教は見出されないのだ」(22)、「完全にそれ自体で独立していなければならない」(28)、「宗教はまったく独自な役目を果たさなければならない」(29)、「宗教は、人それぞれのすぐれた魂の内部から必然的に、おのずと湧き出てくるということ」(30)、「宗教は形而上学や道徳と区別すべきである」(35)、「最高の存在者、あるいは世界についてのいろいろな意見[形而上学]と、一つの（いや、そればかりか二つの）人間生活に対する命令[道徳]のごた混ぜを、きみたちは宗教と名付けているわけだ」(37)、「宗教の本質は、思惟することでも行動することでもない。それは直観と感情である。宇宙を直観しようとするのである。宇宙の独自な、さまざまな表現、行動の中にひたって、うやうやしく宇宙に聴き入り、子供のように受け入れる態度で宇宙の直接の影響にとらえられるよう、宇宙に充たされよう、とする」(42)、「宗教は無限なものを受け入れる感性、趣味である」(44)、「高次の実在論」(45)、「直観するとは、直観されたものが直観するものへ及ぼす影響、すなわち、直観されたものの根源的、独立的な動きに基づいている」(46)、「すべての個体を全体の部分として受け取り、すべて制約されたものを無制約的なものの表現として受け取る、これが宗教である」(46)、「世界におけるすべての出来事を神の働きと考えること、これが宗教なのだ」(48)、「すべて存在するものは、宗教にとっては、真実な、それなしではすまされない無限なものの象徴なのだ」(54)、「あらゆる直観は、その本性から感情に結び付くのである」(54)

５．「共同体と信仰」という問題連関（第三講、第四講の意義）:「孤立した個」の限界

・「基礎的段階をなす自然的時間とそれの上に建設される文化的時間との区別に、アウグスティヌスが想い到らなかったことは確かにこの説の欠陥である。……しかして文化的生が自然的生よりの解放の企画を意味することを思へば、上述の如き欠陥と関連して、彼の説いた「時」が単純孤立の状態にある主体の生き方を意味するに過ぎなかったことは、当然の事態といふべきであらう。」(波多野精一『時と永遠』293-294)

「かくしては持続としての時は文化的時間より将来を取除いたものに過ぎぬであらう。さてすべてこれらの事どもはいづこに源を有するのであらうか。いふまでもなく、主体が単独孤立の立場に置かれたことが一切の誤謬の原因である。」(同書、295)

↓

これは、波多野による、アウグスティヌスとベルグソンの時間論に対する批判である。つまり、孤立した個・主体（抽象的な人間存在＝閉鎖系。ロイ・バスカーの経験主義批判！）が、人間理解において有する決定的な限界である。

・「およそ実存論神学におけるひとつの問題点は、信仰的現存在の決断における脱自的超越がいかにして「共人性」(Mitmenschlichkeit)を自己化するか、という問題である」、「実存論神学における最大の弱点は教会論にある。」(森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社、1972年、506頁)

「「わたし」と「われわれ」は、それほど単純に同一視されたり、単純に相互転換されるとは、考えられない。」(同書、512頁)

・以上の点で、シュライアマハーの宗教論の第三講、第四講は、注目に値する。

（２）シュライアマハーと宗教哲学の基本問題

６．宗教哲学とはいかなる学問か

・波多野：「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異なって、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である。」
・批判的実在論：宗教も科学もそれがコミットする存在の実在性を前提にする。そして、宗教と科学という人間の活動は実在する。この実在する宗教と科学とが存立するための条件を解明することが、宗教哲学と科学哲学の課題となる。
「宗教が可能であるためには、その主体である人間はどのようでなければならないか。」（←ロイ・バスカー「科学が可能であるためには、その対象である世界はどのようでなければならないか。」）

７．宗教哲学の基本問題（宗教研究基礎論、宗教研究の哲学）→具体的な多様な宗教研究
（芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994 年、13-18 頁）
(1)宗教とは何か。（第二講・宗教の概念規定：哲学的人間学・現象学的類型論）
(2)宗教はいかなる積極的な存在意味を持つのか。（第一講・宗教批判の批判的検討）
(3)なぜ、多様な宗教が存在するのか。（第五講・宗教的多元性）
↓
この基本問題との関わりで、シュライアマハー、波多野精一、ティリッヒ、ヒックを検討する。

＜参考文献１・日本語の研究文献を中心に＞

１．シュライエルマッハー　『宗教論』岩波文庫、筑摩書房。
Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern (PhB 255).
On Religion. Speeches to its cultured despisers
(translated by Richard Crouter, Cambridge University Press, 1988).
Introduction. pp.1-73.
２．大峰顕編『神と無』（『叢書ドイツ観念論との対話』［５］）ミネルヴァ書房。
３．プレーガー　『シュライアーマッハーの哲学』玉川大学出版部。
４．ジェームズ・デューク、フランシス・Ｓ・フィアレンツァ
『シュライエルマッハーの神学』ヨベル。
５．武安　宥　『シュライエルマッハーの教育学研究』昭和堂。
６．川島堅二　『Ｆ・シュライアマハーにおける弁証法的思想の形成』本の風景社。
７．ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅱ』（ティリッヒ著作集・別巻３）白水社。
８．波多野精一『宗教哲学』『宗教哲学序論』『時と永遠』岩波書店。
９．武藤一雄『神学と宗教哲学との間』創文社。
10. 芦名定道「ティリッヒとシュライアーマッハー」、『ティリッヒ研究』（現代キリスト教思想研究会）第２号、2001 年、pp.1-17。
11．**Web**
川島堅二氏のサイト：http://homepage3.nifty.com/ex-cult110/schleiermacher/
日本シュライアマハー協会：http://www1.doshisha.ac.jp/~sgjapan/

Ｂ．ヒックの宗教哲学

（１）宗教の神学

１．宗教的多元性（複数性）と宗教多元主義：古い問題と新しい問題
２．近代的問題状況：人間の営みとしての宗教とその多様性、その中におけるキリスト教
３．宗教的多元性と教派的多元性　→　エキュメニズム
４．現実：対立・相克（戦争）、民族・経済・政治の状況下での宗教
５．多様性を整理しキリスト教をそこに位置づける議論

・啓示論、救済論、歴史神学　→　土着化論

・宗教類型論から価値判断へ：排他主義、包括主義、多元主義

６．諸テーマ（問題群）：戦争と平和（戦争論・平和論）、宗教間対話（対話論）、寛容（宗教的寛容論・信教の自由・政教分離）

（２）ヒックと英語圏の宗教哲学

・*Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963（1990）.

Introduction　What Is the philosophy of Religion?
Chapter 1　The Judaic-Christian Concept of God
Chapter 2　Arguments for the Existence of God
Chapter 3　Arguments Against the Existence of God
Chapter 4　The Problem of Evil
Chapter 5　Revelation and Faith
Chapter 6　Evidentialism, Foundationalism, and Rational Belief
Chapter 7　Problems of Religious Language
Chapter 8　The Problem of Verification
Chapter 9　The Conflicting Truth Claims of Different Religions
Chapter10　Human Destiny: Immortality and Resurrection
Chapter11　Human Destiny: Karma and Reincarnation
For Further Reading

・*An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.

1 Introduction
　1 A Religious interpretation of religion
　2 Religion as a family-resemblance concept
　3 Belief in the transcendent
　4 Problems of terminology
　5 Outline of the argument

Part One　Phenomenological
2 The Soteriological Character of Post-Axial Religion
3 Salvation/Liberation as Human Transformation
4 The Cosmic Optimism of Post-Axial Religion

Part Two　The Religious Ambiguity of the Universe
5 Ontological, Cosmological and Design Arguments
6 Morality, Religious Experience and Overall Probability
7 The Naturalistic Option

Part Three　Epistemological
8 Natural Meaning and Experience
9 Ethical and Aesthetic Meaning and Experience
10 Religious Meaning and Experience
11 Religion and Reality
12 Contemporary Non-Realist Religion

13 The Rationality of Religious Belief

Part Four　Religious Pluralism
14 The Pluralistic Hypothesis
15 The *Personae* of the Real
16 The *Impersonae* of the Real

Part Five　Criteriological
17 Soteriology and Ethics
18 The Ethical Criterion
19 Myth, Mystery and the Unanswered Questions
20 The Problem of Conflicting Truth-Claims

Epilogue: The Future

・*Disputed Questions in Theology and the Philosophy of Religion*, Macmillan, 1993.

（３）ヒック宗教哲学の基本構想

Ａ．宗教概念
　宗教史・宗教現象　→　基軸時代・救済宗教：自己中心から実在中心への転換
　ポスト・モダン（本質主義以降）の概念規定　→ヴィトゲンシュタイン・家族的類似性
Ｂ．宗教批判：近代以降の思想状況における宗教論
　自然主義への論駁、宗教経験の擁護　→　合理性概念の再検討、終末論、
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宇宙的楽観主義、還元主義批判
　神の存在論証と悪論・神義論
　宗教言語論　→　宗教的実在論
Ｃ．宗教的多元性：宗教的状況の現代
　多元性と実在　→　the Real
　キリスト教の再解釈　→　排他主義、包括主義批判

　以上の三つの問題領域は相互に結びついて宗教哲学の基礎問題を構成する。

（４）宗教言語と宗教的実在論

　ここでは、Ｂについてヒックの議論をまとめてみよう。
１.『人はいかにして神に出会うか――宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館。
・The principle of critical trust
　「首尾一貫しないこの認識論の現況は、イギリス経験論が発展していく伝統のなかでしだいに明らかにされてきた。この伝統に属する思想家たちの独創性と才能を十分に論じることができないとしても、まずはそれを簡潔に要約すべきであろう。」(102-103)
　John Locke（1632-1704）（127)、George Berkeley（1685-1753）、David Hume（1711-76）
　G.E.Moore　(1873-1958)：ムーアは「二十世紀前半のもっとも重要な哲学者の一人であるが、この点でヒュームを支持し、私たちは証明できない多くのことを知っていると主張した。」(106)

> There exists at present a living human body, which is *my* body.
> The earth has existed also for many years before my body was born.

「実のところ、真理を直視するという意味での「知る」という言葉の理念的（つまりプラトン的）な意味において、あるいは論理的に誤りを犯しえないような心の状態にあるとき、私たちはただ現在あるままの意識内容と、そして」「分析的真理、つまりトートロジーの真理を知るだけである。」(106)

「ロックとバークレーに準拠し、そのため二十世紀のコモン・センス学派ないし日常言語学派の哲学者たちに支持されるヒュームは、私たちがつねに拠りどころとして生きている暗黙的な原理の定式化を可能にしてくれる。これは、とくに疑う理由のないかぎり、そこにあるように見えるものはそこに存在するものとして受け入れる、ということを指している」、「通常、私たちは自らの経験を信頼している。また、もし信頼しなければ、一日たりとも、いや一時間たりとも生きていくことはできないだろう。しかし、これは盲目的な信頼ではなく、いつでも修正できる批判的な信頼である。もしも急に目が覚め、それが書斎にいてパソコンで仕事をしている夢であったとわかったならば、そのときにはよく思い返してみて、夢で見た経験は思い違いであった――夢は思い違いをさせるものだという特別な意味のもので――と考えなおすだろう。」(107-108)

「私たちが生きていくうえで拠りどころとしている暗黙の原理は、批判的信頼ということになる。」(108)

「では、どうしてこの「批判的信頼」のを原理を、宗教体験も含めて、明かな認知体験一般に当てはめてはいけないのだろうか。」(109)

・Experiencing as interpreting / critical ralism

「世界についての意識的経験と意識される世界とのあいだの関係に関して、三つの主要な立場」の区別。

「一つは素朴実在論」「私たちの身に周りの世界はそのあるがままの姿であるように思えるとする、日常的な自然な想定」、「すべての実際的な目的のためにはこれで何の支障もない。というのも、進化するにつれ、私たち人間の感覚は」「絶えず調節されてきたからである。」(119)

「素朴実在論に真っ向から対立するのが「観念論」である。これは、知覚された世界は私たちの意識のなかにあるだけである――より正確には私の意識のなかにだけある――、なぜなら私が交互作用する他者は、私の知覚世界の一部であるからだ、と主張する立場である。」(120)

「三つ目の、中間に立つ立場は、批判的実在論である。その基本原理は近代哲学に最大の影響を及ぼしたイマニエル・カント」「にまでさかのぼる。カント以前にも類似の考えは多くあったが、その内容を体系的な方法で明らかにしたのはカントであった」、「つてつもなく複雑」「ところどころ多様な解釈を迎え入れている」、「しかしカントは、私たちを超える実在、私たちから独立して存在する実在というもの容認した。けれども、実在はそれ自体では意識されず、観察もされないと論じた。それは、ただ人間精神の生得的構造としてのみ、その実在からのインパクト（衝撃）を、現象界のかたちをとって、意識にもたらすことができる。そこで私たちは各自の認知的感官によって、また意識の諸形式と諸カテゴリーによって、私たちに現れるままのものとして世界を意識するのである。」(121)

「「批判的実在論」というのは、二十世紀のアメリカの哲学者によって生みだされた言葉であるが、これは世界が存在すると気づくことに心が創造的に寄与することを認める一方、その世界が私たちからは独立して存在するという実在論的な主張を表明する。その主張は十分に確証され、認知心理学や知識社会学において長く認められてきた。」(122)

「経験するとは解釈することであるというとき、私は「解釈する」という言葉を、聖書解釈でいうテキストの解釈」「の意味で使うのではなく、環境が私たちの感覚にもたらす

インパクト（衝撃）をつねに私たちは解釈しているという意味で使う。また「意味」という言葉を」「私たちが目的にかなった行動や対応ができるように仕向ける事態の特質という意味で使う」、「ウィトゲンシュタイン」「の「何かを何かとして見る」と呼んだものによって」（122）、「私たちは「それを解釈しながら見ている」のである」、「「何かを何かとして見る」は、私たちが日常生活のなかでいつもするように、すべての感覚を一つに合わせて使うときの「何かを何かとして経験する」にまで、ただちに拡張することができる。」（123）

２．*An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.

11 Religion and Reality（pp.172-189）

religious realism

Religious experience, then, is structured by religious beliefs, and religious beliefs are implicit within religious experience.

And by analogy religious realism is the view that the objects of religious belief exist independently of what we take to be our human experience of them. For each religious tradition refers to something ... that stands transcendingly above or undergirdingly beneath and giving meaning or value to our existence.（172）

Religious realism is not of course to be equated with a straightforwardly literal understanding of religious discourse.

We can therefore only experience the Real as its presence affects our distinctively human modes of consciousness, varying as these do in their apperceptive resources and habits from culture to culture and from individual to individual.（173）

↓

言語の指示機能として、宗教的実在論を論じるという構想。

３．宗教経験への信頼は批判的実在論として擁護できる（Ｂ）。

宗教経験について理論的な議論は無意味ではない。

＋

宗教史と現代の宗教的状況の事実としての宗教の複数性の問題（Ｃ）。

↓

この二つを理解可能にする宗教概念とはいかなるものか（宗教とは何か＝Ａ）。

４．こうした三つの問いを宗教哲学的に明確に論じた上で、キリスト教思想の内容の議論を展開する。

＜参考文献＞

１．宗教の神学
・古屋安雄『宗教の神学――その形成と課題』ヨルダン社、1985年。
・ヒック、ニッター編『キリスト教の絶対性を超えて――宗教的多元主義の神学』春秋社。
・G・デコスタ『キリスト教は宗教をどう考えるか――ポスト多元主義の宗教と神学』教文館。
２．John Hick
・*Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963（1990）.（『宗教の哲学』勁草書房。）
・*An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.
・*Disputed Questions in Theology and the Philosophy of Religion*, Macmillan, 1993.

・*The New Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscience and the Transcendent*, Palgrave Macmillan, 2006. (『人はいかにして神に出会うか　宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館。)
３. ジョン・ヒック『ジョン・ヒック自伝　宗教多元主義の実践と創造』トランスビュー、2006年。
４. 間瀬啓允『現代の宗教哲学』勁草書房、1993年。
５. 間瀬啓允・稲垣久和編『宗教多元主義の探究―ジョン・ヒック考―』大明堂、1995年。
６. 間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、2008年。